



研究者 **小林英成** (伊那市立伊那小学校)

共同研究者 **苫野一徳** (熊本大学大学院 准教授)

### テーマ

子どもたち一人ひとりの“うずちゃん”との世界を、共に歩みながら探りたい

### 三人のつくりだす世界をたのしむ

7月3日、朝陽(仮名)は「秋庭(“うずちゃん”とすごしている中庭)に行ってもいい」と教師に尋ねました。教師が頷くと、朝陽は小走りに音楽室(“うずちゃん”が生活している部屋)に行き“りつは”(雌の“うずちゃん”)を両手に抱くと、顔を“りつは”の耳元に近づけて何か話しかけながら秋庭へ向かいました。秋庭に着くと、朝陽は“りつは”に「今日は自分で餌を探すんだぞ」とはっきりした口調で言うと“りつは”を秋庭の隅にある砂地へそっと脚をつかせ、両手を離しました。

“りつは”は砂地を歩きながら、小さな虫を飲むように口に入れたり、草むらの小さな葉を口ばしで突いたりしました。朝陽は音を立てないように地面にしゃがみ、膝に顎をつけて目を大きく見開きながら、黙って“りつは”の様子をみていました。しばらくして“りつは”が10cmほどの大きなミミズを見つけて、その端をしきりに突きました。朝陽は“りつは”が突く様子を見ながら「ミミズ、半分にしてあげるよ」と“りつは”に言うと、地面のミミズを半分に指でちぎって“りつは”の口ばしに近づけました。“りつは”は朝陽の差し出す手に向かって近づくと3回ミミズを突いてから丸飲みしました。その様子を見た朝陽は、後ろにいた拓也(仮名)に向かって何も言わずに顔をくしゃくしゃしにして笑顔になりました。

朝陽と“りつは”の間には、二人のつくりだす世界があります。朝陽は“りつは”を中心に多くの“うずちゃん”の動きをよくみたり、掌で“うずちゃん”を包みながら自分の体で“うずちゃん”を感じたりしてきました。ただ、それは私が朝陽の姿をみて心に留めたほんの一部であり、この2年間で朝陽の内には“うずちゃん”とともに貯めこまれてきたものがあるように思います。朝陽と“りつは”の傍らで、私もたのしみながら、この朝陽と“りつは”の世界を感じたいです。



共同研究者 苫野先生から

「子どもは自ら求め、自ら決め出し、自ら動き出す力を持った存在である」。小林先生は、この本質的な伊那小の子ども観の、さらに奥へと目を向けておられるように感じています。うずちゃんと、そして世界と、子どもたちはどのように独自の仕方ですれを結んでいるのか。そのまなざしに、私も同乗させていただきながら、子どもたちの学びの世界を味わい、大いに学ばせていただきたいと思っています。

### ～日程～

- |         |                                  |
|---------|----------------------------------|
| ① 受付    | 13:00～13:10                      |
| ② 開会式   | 13:15～13:55                      |
| ③ 授業参観  | 14:00～14:45                      |
| ④ 授業研究会 | 14:55～15:40                      |
| ⑤ 講演会   | 15:45～16:45                      |
|         | 「子どもを見る・知る」<br>～伊那小の実践の本質的意義～(仮) |
| ⑥ 閉会式   | 16:45～16:55                      |